特集

先端研の考える明日の「共生・公平・衡平」

RCAST's Vision for Tomorrow: Coexistence, Equity, and Balance

先端研はなぜ「共生・公平・衡平」について考えるのか

杉山正和所長・教授

東京大学　先端科学技術研究センター（通称：先端研）は、実にさまざまな研究領域をカバーする研究者たちが研究に存分に専念できる組織でありたいと考えています。それと同時に、それぞれが自律分散的に、各々が正しいと思う方向に向かってもらいたいとも思っているのですが、それだけだと分散型になってしまうので、「自律」というそれぞれの信じる方向を向きながらも、その集合体である組織が、全体としてどんな思いを追求し、その結果をどのように社会にもたらすのか、もっというのであれば、より「あるべき社会」を念頭に置きながら活動して突き進んだ結果、何が起きるのか、をひとりひとりが考えながら行動することを理想としています。

それは単に個々の活動だけではなくて、この地球の上では、人間だけではなく様々なエンティティが生きて存在しているので、そうした人間以外の、あるいは自分以外のエンティティに対して、自分の行動がどういう影響を与え、そしてそこからまた自分の将来の姿がどう変わってくるのか、というところを、空間軸も時間軸も踏まえた上で考えながら行動してほしいとも同時に思います。

先端研は、２０２７年に40周年を迎えます。これに向けて、今後の先端研の方向性を真剣に、かつ自由に考えるフリーディスカッションを先端研のメンバーと昨年から1年ほどか

けて何回か行ってきました。

その中で先端研が目指すものとして、いわゆる社会包摂から繋がる調和のとれた社会、皆が生き生きと、誰ひとり取り残されずに活躍できるというような意味で「共生」という言葉を使いました。私としてはポジティブな意味での言葉でしたが、並木重宏准教授、当事者研究を進められている熊谷晋一郎准教授から、この「共生」という言葉のさまざまな意味、多義性といったことが知らされ、この言葉に対して複数の受け取り方があるということが明らかになったというわけです。

この時に、「共生」という言葉とともに「公平」と「衡平」という言葉についても話題に上りました。この「共生」「公平」「衡平」という言葉について考えるとともに、その先に広がる先端研と社会とのつながりについて話をしてみようということで、今回の特集は組まれました。

特集「先端研が考える明日の『共生・公平・衡平』」は、私を含めた4人の座談会「知の探求は、『共生・公平・衡平』の調和された世界をもたらすのか?」と3人の鼎談「ハレとケで実現される『公平』な世界観とは」で構成されます。